

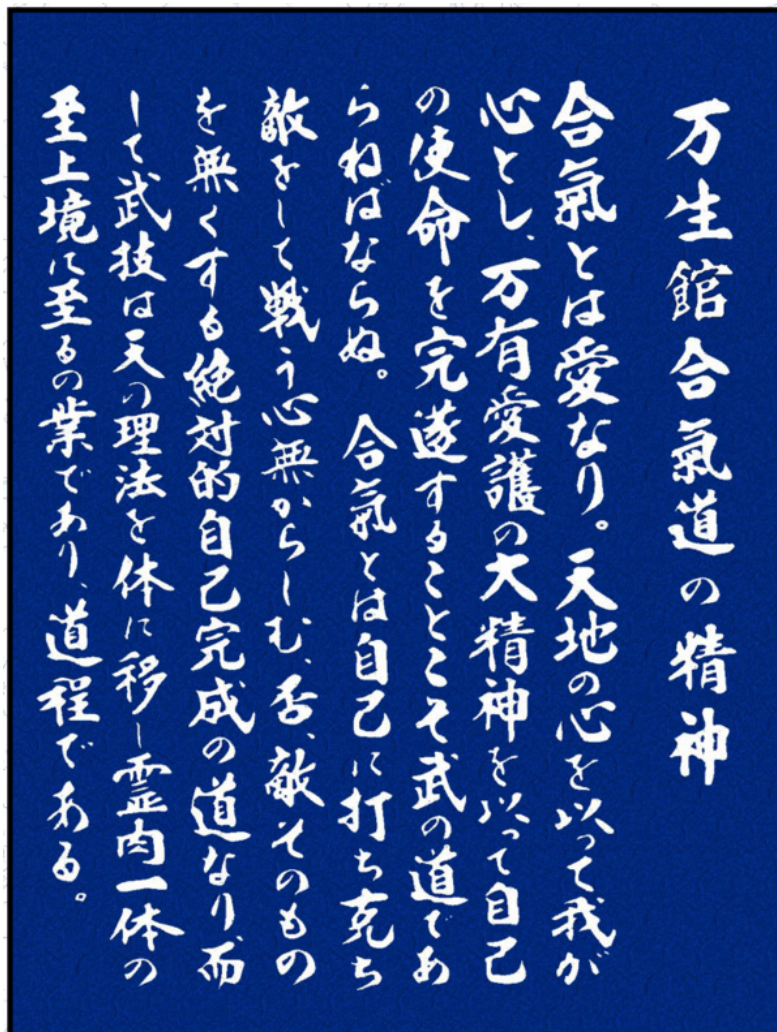
3、合気道の精神

“合気とは「愛」であり、あらゆるものを愛護することを自己の使命として完遂するのが真の武の道である。合気とは自己に打ち克ち、敵の戦う心をなくす、いや、敵そのものをなくしてしまう絶対的な自己完成への道なのである。”（植芝盛平翁「合気道」より抜粋）

出典：植芝盛平監修・植芝吉祥丸著『合気道』（昭和 32 年 光和堂発行 p. 219）

合気とは「愛」であり、天地の大愛を心として、あらゆるものを愛護することを自己の使命としなければならない。その使命を完遂するのが真の武の道でなければならない。真の武は自己に打ち克ち、敵の戦う心をなくす……いや、敵そのものをなくしてしまう絶対的な自己完成への道なのです。そして合気の武技は天の理法を体得して、霊肉一体の至上境にまで到達するまでの業であり道程なのです。

原典：神示、又は開祖と奥村師範らとの共作（2 つの異なる言い伝えあり）



「合氣とは愛なり。天地の心を以て我が心とし、万有愛護の大精神を以て自己の使命を完遂することこそ武の道であらねばならぬ。合氣とは自己に打ち克ち敵をして戦う心なからしむ、否敵そのものを無くする絶対的自己完成の道なり、而して武技は天の理法を体に移し霊肉一体の至上境に至るの業であり、道程である。」

- 合氣道開祖植芝盛平翁の御神示に、「万有愛護の大精神を以て自己の使命を完遂することこそ武の道であらねばならぬ」とある。神界から、翁に対する合氣道の使命を伝えられたものである。(砂泊誠秀)

「合氣道開祖植芝盛平翁は、合氣道の目的をはっきりと教示しておられるのである。

「合氣とは愛なり。天地の心を以て我が心とし、万有愛護の大精神を以て自己の使命を完遂する事こそ武の道であらねば成らぬ」と。(砂泊誠秀著『合氣道で悟る』p. 109)

- 「合氣とは自己に打ち克ち敵をして戦う心無しからしむ、否、敵そのものを無くする絶対的自己完成の道なり。而して武技は天の理論を体に移し霊肉一体の至上境に至るの業であり、道程である。」(敗戦後、盛平と奥村繁信らが共同で作成した『合氣道の精神』後半。『合氣ニュース』132号 p. 18)

解釈：

合氣とは「愛」であり、あらゆるものを愛護することを自己の使命として完遂するのが真の武の道である。

合氣道の理合は「愛」である。天地（神）の大愛で相手を包むような雄大な気持ちで対し、世の中の生きとし生けるものに「さあどうぞ貴方のお好きな所に行きなさい」と喜びを与えるように努めるのが宇宙の真理（神の御心、天地の法則）に即した武道である。

「合氣道で宇宙の魂をみがく者は、この源をよく究めて、宇宙の真理に叶い、宇宙の御心に叶うように、万有愛護の心をもって、世の中の生きとし、生けるものに喜びを与えるように接しなければならない。」

「自分の心に相手を包む様な雄大な気持ちで対すれば、相手の動作を見抜く事が出来る。そこでそれに合して右左に体をかわす事も出来る。」

「相手が掛かって来たら、ちょっと体を避（よ）けまして、どうぞ貴方のお好きな所に行きなさいとやるんです。合氣は、つまりその人に自由を与える訳です。」

自己に打ち克ち、敵の戦う心をなくす、いや、敵そのものをなくしてしまう絶対的な自己完成への道なのである。

相手をやっつけよう、相手と戦おうとする自分の心に打ち克ち、相手を皆空（宇宙）の中心、即ち自分の中心にまで導き入れて相手を吸収すると、相手が気持ちよく宇宙と一体となってくれるので、自分と相手という相対の世界がなくなってしまう。そして、自分と一体となった相手を自在に動かせるようになる。このように万有愛護の精神で自他一体、宇宙即我という自分を作るのが合氣道である。

「言霊の妙用は一声よく天地を震動し、一音よく風雨雷霆を駆使し叱咤する絶対無限の権力あれ共、

之を使用する人々の正邪に依りて、非常なる径庭のあるものである。昨日迄バラモン教を開き、誤りたる信仰を続け、心は拗け、魂は曇り、言霊の曇りたる者は、如何に完全に、能弁に善言美詞を述べ立つればとて、万有一切に対し毫末も、其感動を与へざるは、実に神律の厳として冒す可らざる所以である。又魂よく研げ慈愛に富み、心中常に寛容の徳ある捨子姫の言霊は、前者に比して極めて簡単なものであつた。されど暴悪無道の醜の大蛇も、厳として動かす可らざる捨子姫の清明無垢の臍下丹田より迸れる万有愛護の至誠より出でたる言霊には、如何に頑強なる邪神と雖も、到底之れに抵抗するの余地なく、漸く心andraぎ、浪静まり、雨は止みあたりを包む黒雲も次第に、言霊の權威に依つて払拭されて了つたのである。」(『靈界物語』30-3-11 海洋万里已 言霊の妙)

「合気道は相手が向かわない前に、こちらでその心を自己の自由にする(即ち万有愛護の精神によって)自己の中に吸収してしまう。つまり精神の引力の働きが進むのである。世界を一目に見るのである。」(『武産合気』)

「真の武道とは、宇宙そのものと一つになることなのです。宇宙の中心に帰一することなのです。合気道においては…世界人類の平和のため、少しでもお役に立とうと、自己を宇宙の中心に帰一しようとする心が必要なのです。合気道とは、各人(相手)に与えられた天命を完成させてあげる羅針盤であり、和合の道であり愛の道なのです。」(『武産合気』)

「それには、まず神の心(万有愛護の精神)を己の心とすることだ。」

「人の目を見たり、相手の技を見たり、姿を眺めているんじゃないですよ。全部自分の腹中へ、身の内へ入れてしまうんですよ。自分の腹の中に在るんだから別に争う必要が無い。大宇宙が自分に在るという事や。全宇宙が自分の腹中に在る事や。」(昭和40年頃のラジオ会見記『合気ニュース』142号 p. 15)

「合気道においては常に相手がなく、相手があっても、それは自分と一体になっていて、自在に動かせる相手なのです。」(『合気道』)

「山口(清吾)先生は大先生の受けを取られていて、胸を突くと、ずっと吸い込まれるような感じがする、と言われていました。ぶつかりがないんですね。手を取られると、自分の手がすーっと細くなっていくような気がするとも言われてました。」(佐原文東先生氏談)

「大先生は道場に現れただけで吸い込まれる感じでしたね。山口清吾先生も吸い込まれるんだけど、大先生は『同化する』という感じが強くて、取る取られるの相対的な関係では無く、『一つに成ってしまう』感覚。言葉もね、根源の所、魂で話している感じでしたね。」(武田義信先生談)

